

ロッテ・デ・ベア演出の新制作! 権力を持たない王子の悲哀を描く

東京二期会《ドン・カルロ》

10月13日●東京文化会館 大ホール

取材・文=岸 純信

あとからじわじわ効いてきた公演。原稿を3度書き直した。指揮者レオナルド・シーニの鋭い棒が、「落涙の装飾音」を東京フィルハーモニー交響楽団から引き出した瞬間、「おっ、そこから!」とこちらも身構えた。世界初演のおり、観客を最終列車に間に合わせるべく削られたシーンのうち、今回は〈戦争難民のコーラス〉が復活。二期会合唱団が切々と歌い、樵の男の短いソロも響き、人々を慰める王女(のちに王妃のエリザベッタ)の一声〈戦はもうすぐ終わりますよ〉も耳にはっきり飛び込んできた。

ヴェルディの《ドン・カルロ/カルロス》は本来5幕立てのグランド・オペラだが、いまは4幕改稿版のイタリア語訳歌唱が一般的。しかし、本作の悲劇性は、王族たちの自己犠牲を描く「元の第1幕」にある。今回は、モデナ版(4幕改訂版に元の第1幕を戻し、

重複部をカット)をイタリア語で歌ったが、音楽に一部改造があり、第3幕はバレエ曲から始まり(途中から現代ふうアレンジでフェイドアウト)、ソリストや助演者勢のマイムが続いた。児童が一行に並ぶさまなど、《マクベス》第3幕にも似た神秘性が見て取れた。

演出家ロッテ・デ・ベアは、公開稽古の席上で「権力を持たない王子の悲哀を描く」と明言したが、その狙いは随所で滲出。ドン・カルロ(樋口達哉:Tが圧倒的な声量のもと熱演)のロマンツァに常ならぬ悲しみがにじむのも、レルマ伯爵(前川健生:Tの声の通りがよい)の無礼さも、その視点ゆえの産物である。

思うに、この演出家は「一瞬のドラマ性」に賭ける人のよう。先述の群衆シーンの構図の広がりや、第2幕の男声二重唱での国王夫妻と女官勢の凄絶なる立ち姿、続く名アリア

〈ヴェールの歌〉の前奏部における「人々の配置の美」など特筆すべき完成度と思う。また、第1幕で純白のシーツをまとっただけの王女の苦悶の面差しも、自身の「性」が政争の具になる虚しさをよく伝えていた。

ただいっぽうで、ブランのすみずみに首をひねったことも事実。小姓テバルド(中野亜維里:Sが健闘)が伯爵夫人と一体化する辺りや、修道士(島山茂:Bs-Br)の豊麗な響きが好感触)の大詰めでの扱いには疑問を覚えた。しかし、エボリ公女(清水華澄:Msがよりいっそうの劇的表現力を駆使)やロドリゴ(小林啓倫:Brの男気と逞しいフレーズングが傑出)の人物像がより鮮やかに表された点と、国王(ジョン・ハオ:Bs-Br)と宗教裁判長(狩野賢一:Bs-Br)の異なる声音が対照の妙を際立たせたことなど、心に遺るポイントも多かった。



中央、エリザベッタ役の竹多倫子(S)。熱い声音が光った ©寺司正彦/公益財団法人東京二期会